

## まなかの庭

私は小さい頃から自分の家の庭が好きだった。そんなに大きな庭ではないが、家の大きさに比べると、ずいぶん大きな面積だった。

母が園芸好きで、食べられるものもいくつか植えてあつたし、入り組んだ形で庭石が置いてあつたり、季節ごとの花が咲く木も植えてあつた。だからその庭にはいろいろな顔があつた。

そしてその小さな世界には私がくつろげる場所もいくつかあつた。私はそこを大切に思い、子供の時は服のままで地面にすわったり寝転んだりしていた。やがて大人になつてからはきちんと敷物を敷いて飲み物を持つて、ひまさえあればすわつていた。なにもしないでいてよく飽きないね、と母や父や裕志は言うが、私はほんとうに飽くことなく、大きい

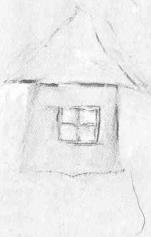
空を見ては、足元のこけや蟻を見、また空を見ると雲の位置や空の色が変わっている。と  
いうように少しずつ変わっていく世界を眺めて、しばらくすると今度は自分の手に光が当  
たっているのを眺める、という感じで、時間がどんどん過ぎていくのがこわいくらいだつ  
た。

あまりにも長年ずっと同じ眺めなので、私はそこにいると自分がいくつなのかわからな  
くなる時があった。大きな庭石にもたれていますわり、やはり交互に空や、大ぶりの枝や葉を  
見上げ、その後に蟻や小石や土を見る。そうすると、自分の大きさまでもがわからなくな  
つて、嬉しくなった。たまに母が買い物に出て行ったり、父が早く帰宅したりして、庭に  
いる私を見つける。私が晴れている日に部屋の中にいるのが嫌いなことを、両親は映像で  
知っている。晴れた日は、私はもはや庭の一部だ。当然のことのようにあいさつをして、  
二人は門をくぐる。

裕志がやつてくることもある。裕志は門からやつてくることはない。竹垣を乗り越えて  
くる。裕志は目が悪いので、いつも目を細めてげんなり顔で私を確認する。私は笑う。裕  
志も笑う。その笑顔には、二人が会ってからの、子供から大人にいたる全ての歴史が刻  
み込まれている。長い間同じことをしていると、そこに妙な深みが生まれることがある。

人の壁はまことにそういうものだ。人をきらひの厳しくすばらしいことがあるとは思  
いつかないくらいの深い交流が一瞬、横切る。

そういう時、私はほんとうに壁も天井もない所にいると思う。私たちは、時間の流れを  
含めた全てに見捨てられて、この世に一人きりで目を合わせている。音楽が聴こえるよう  
な、草の甘い匂いがしてくるような気がする。感覚だけが、魂だけが生き生きと、この壁  
がない世界で、空が大きく広がっている下で、向き合う。年齢も性別もなく、孤独な感じ  
がするが、広々している。  
どこにいようと、なにかふと不安を感じた時、心の中でいつの間にか私は庭にいる時  
自分に戻つていくことがある。庭は、私の感覚が出発した地点、永遠に変わらない基準の  
空間だ。



MAYA  
MAIL  
2007